



故勲二等三宅速勲章加授ノ件  
右謹テ裁可ヲ仰ク

昭和二十年七月二十八日

内閣總理大臣男爵鈴木貫太郎

内閣

6.29

53

賞勳局上申第三六五號

二六

昭和二十年七月廿八日  
昭和二十年七月廿八日  
昭和二十年七月廿八日

昭和二十年七月二十八日

内閣書記官長

内閣書記官

内閣總理大臣

五

賞勳局總裁



20.7.28

故勲二等三宅 速ハ明治三十七年九月京都帝

國大學福岡醫科大學教授ニ任官同四十四

年四月九州帝國大學創立ト同時ニ同大學教授

ニ任セラレ昭和二年十月退官ニ至ル迄能ク學子生

ノ指導ヲ誘掖ニ努メタリ 同人ハ夙ニ内臟外科

特ニ胃癌及胆石症ニ關シ學術並ニ臨床方面ニ

リ幾多ノ業績ヲ擧ゲタルが就中胆石症ニ關

賞勳局

スル研究ハ斯學界ニ新生面ヲ開キタルモノニシテ

其ノ著述セル「日本ニ於ケル胆石症」ハ東亞共榮

圈ニ於ケル胆石症ノ特徵原因及療法ヲ闡明シ

本邦學術ノ眞價ヲ海外ニ顯揚セシメタリ又第

一次世界大戰後國際外科學會ト獨逸外科

學會ト互ニ對立徑庭シ憂慮スベキ情態ニアリ

タル際八方斡旋シ幾多ノ難關ヲ排除シテ遂

ニ獨逸ヲ同會ニ加入セシムルコトニ成功シ國際外科

學界ニ寄與セリ其他再度日本外科學會會

長ニ擧ゲラレ我國外科學界ノ向上ニ效セル等

功績顯著者ニ候處六月二十九日死去セル趣ニ  
付此際特ニ同日附ヲ以テ旭日重光章ヲ加授  
セラレ度此段允裁ヲ仰グ

賞  
勳  
局

故九州帝國大學名譽教授勳二等 三宅 速

右ハ明治二十四年十一月東京帝國大學醫科大學ヲ卒業、明治三十一年三月ヨリ同三十三年六月迄獨逸國ニ留學シ、歸朝後其ノ研究業績ヲ論文トシテ提出シ同三十四年六月醫學博士ノ學位ヲ授與セララル。同年九月ヨリ大阪府立醫學校教諭兼同病院外科醫長ヲ囑託セラレシガ、明治三十六年五月官選留學生トシテ外科學研究ノ爲獨逸國ニ留學ヲ命ゼラレ、内臟外科殊ニ胃腸及膽石症ノ手術ニ就キ研究シ、明治三十七年九月歸朝ト同時ニ京都帝國大學福岡醫科大學教授ニ任ゼラル。時恰モ日露戰爭勃發ノ際ニシテ國難ヲ座視スルニ忍ビズ同三十八年三月陸軍大臣ヨリ陸軍衛生勤務補助ノ件ヲ認可セラレ小倉陸軍病院ニ於テ陸軍衛生事務ニ没頭シノ功績ヲ認メラレタリ。明治四十四年四月大學令改正ニ依リ九州帝國大學創立セララルルヤ九州帝國大學教授トナリ外科學講座ヲ擔當、大正五年五

文 部 省

月九州帝國大學評議員ヲ命ゼラレテ學政ノ樞機ニ參與シ、更ニ同年五月ヨリ大正八年一月マテ同大學附屬醫院長ニ補セラレ同病院ノ改築ニ盡瘁シ、昭和二年十月停年ニヨリ教授ヲ辭セリ。同人方同大學ニ職ヲ奉ズルコト二十三年ニ及ビ此ノ間終始專攻學科ノ研鑽ニ努メテ怠ラズ幾多貴重ナル業績ヲ學界ニ遺スト共ニ、能ク學生ヲ指導シ後進ヲ誘掖シテ育英ノ功勞極メテ著シク又附屬醫院ニ於テ銳意患者ノ診療ニ努メタル功亦夥シトセズ。其ノ退官ニ際シテハ勅旨ヲ以テ九州帝國大學名譽教授ノ名稱ヲ授ケラレタリ。

同人ハ極メテ眞摯ナル學究ノ徒ニシテ學識甚ダ豊富、研究亦頗ル該博精緻ニシテ斯界ノ權威タルニ背カズ、大正二年及大正十四年ノ二回日本外科學會會長トナリ同會ヲ主宰シノノ向上ニ盡セルガ、又同會ノ宿題報告者トシテ選バルルコト三回ニ及ビ各回ニ於ケル其ノ報告「化膿性筋炎ニ就テ」「本邦ニ於ケル膽石症ニツキ」「膽囊ノ疾患、外科的方面」ハ何レモ獨創新說ニ富ム劃期的ノモノニシテ斯界ヲ裨益セル處多ク、其他「鼠

56  
七月三日  
速 三宅 收 四三号

207.26  
付受

毒病ノ研究「胃全剝出術」「諸種ノ腦手術」等別紙業績目錄所載ノ幾多ノ研究ハ何レモ黎明期ノ日本外科學界ヲ啓發シテ世界的水準ニ迄達セシメタルモノナルガ、就中昭和五年十月學士院賞ヲ授與セラレタル「日本ニ於ケル膽石症」ハ本邦醫學界ニ於ケル最高ノ功績ナルノミナラズ、世界學界ニ貢獻セルモノトシテ本邦學術ノ眞價ヲ大イニ海外ニ顯揚セシメタリ。同人ノ膽石症研究ハソノ生涯ヲ捧ゲタル研究ニシテ夙ニ獨逸國留學中ノ研究業績ナルニシテ學位論文「特ニ膽道ノ細菌感染ヲ主眼トセシテ實驗的並ニ臨床的研究ニ没頭シ遂ニ本邦ニ於ケル膽石症ハ他疾患ト異ナリ本邦獨自ノ特徴ヲ有スルコトヲ發見、更ニ夫レハ東亞共榮圈ニ共通ノモノナルコトヲ豫想シ門下生ヲシテ現地ニ調査檢索セシメテ實證シソノ原因療法ヲ闡明シテ學界ニ貢獻セルモノニシテ、本研究ハコレト關聯シテ發見セラレタル新疾患「原發性十二指腸移動症」ト共ニ全ク世界未見ノ研究ニシテ何レモ泰西教科書中ニモ載録セラレ永遠ニ本邦學術ノ

文 部 省

光輝ヲ世界ニ發揚セシメタリ。之等ノ新發見ヲ骨子トシテ著述セラレタル「日本ニ於ケル膽石症ガ古今獨歩ノ域ニアル研究トシテ帝國學士院ハ昭和五年十月ノ學勳ニ對シ新說創見ノ發表困難ナル外科方面トシテ始メテ學士院賞ヲ授ケラレ學界最高ノ榮典ヲ授與セラレタルモ宜ナリト謂フベシ。猶胃痛ノ切開手術ニ於テモ改善向上ニ竭シ退職迄ニ手術セルモノ二千餘例ニ及ビ其ノ成績優良ニシテ不治ノ難症ヨリ救ハレシモノ甚大ノ數ニ上リ本邦最高標準ヲ示スト共ニ世界最高水準ニ到達セリ。其他學術上ノ研究ノミナラズ醫療手術用具等實際上ノ考案改良多ク斯界ヲ裨益スル處尠カラズ。

右ノ如キ應與ナル學識ヲ傾倒シテ指導育成シタル優才中、大學及專門學校教授タルモノ十五名、醫學博士ノ學位ヲ授ケラレタルモノ八十四名ノ多キニ上リ、ソノ門下生ハ何レモ國立病院長又ハ外科部長或ハ赤十字病院長等ノ官公職ニアリテ地方醫治ノ啓發ニ力ノ又地方醫師會ノ主腦者トシテ活躍スルモノ等全國ニ遍ク、之ニ軍部權要ノ位置ヲ占ムル多數門下

生ヲ加フル時斯學會ニ遺セル功績洵ニ多大ニシテ、日本外科學會ガ同人  
ヲ昭和三年名譽會員ニ更ニ同十七年名譽會長ニ推戴シテ其ノ學德ヲ累仰  
セルモ所以ナシトセズ。

同人ガ本邦ノミナラス國際外科學界ニ好與セル功績又没スベカラザルモ  
ノニシテ、第一次世界大戰後英米佛ヲ主体トセル國際外科學會ト獨逸外  
科學會互ニ對立徑庭シテ相容レズ愛惡スベキ情態ニアリシガ、國際外科  
學會ガ同人ヲ介シテ本邦ニ入會ヲ恣應依頼シ來タレルヲ機トシ、大正十  
一年渡歐シ八方斡旋ニ勞メ幾多ノ難關障礙ヲ排除シテ遂ニ獨逸ヲ同會ニ  
加入セシムルコトニ成功シ同時ニ同會ノ日本支部長ニ推薦セラレ克ク職  
責ヲ帯シ、大イニ國際外科學界ニ奇典シ日本醫學ノ聲名ヲ高カラシメタ  
リ。獨逸外科學會ハ同人ノ此ノ勞力ニイダク感激シ昭和元年十二月同人  
ヲ獨逸帝國自然科學會ノ會員ニ推薦シ更ニ同三年 *Deutsche Zeitschrift*  
*fuer Chirurgie* ノ編輯委員ニ推薦シ日本醫學ニ全幅ノ信頼ヲ捧ゲルニ至  
レリ。

文 部 省

同人ハ生來温厚篤實ニシテ慈愛心ニ富ミ幾多不遇ナル俊英ヲ庇護育成シ  
テ社會樞要ノ地位ヲ占メシメ、眞ニ仁術体侍者タルノ實ヲ示シ老齡ニ及  
ンデ倦マズ孜々トシテ研究ニ學界ニ育英ニ盡瘁シ以テ皇國ノ危局ニ際シ  
愈々奉公ノ誠ヲ致シツツアリタル處圖ラズモ六月二十九日空襲ニ依リ覺  
去セルニ付此際救上ノ勳績ヲ録セラレ特ニ生前ニ通り勳賞加授ノ榮ヲ與  
ヘラルル蒙御詮議相成度

右稟申ス  
昭和二十年七月廿六日

文部大臣 太田 耕造

内閣總理大臣男爵 鈴木 貞太郎 殿

故九州帝國大學名譽教授從三位勳二等 三宅 速

故三宅速名譽教授ハ明治二十四年十一月東京帝國大學醫科大學ヲ卒業シ成績優等ノ故ヲ以テ恩賜ノ銀時計ヲ拜受ス。同二十五年醫科大學助手ニ任ゼラレ同三十一年三月獨逸國へ留學同三十三年六月歸朝ス。三十四年六月獨逸國ニ於テ研究セル業績「特ニ胆道ノ細菌感染ヲ主眼トセル胆石ノ人工的的形成機轉ニ就テ」ヲ主論文トシテ提出シ醫學博士ノ學位ヲ授與セラル。教授ノ後年ニ於ル學士院賞ヲ授ケラレシ「日本ニ於ル胆石症」ナル業績ハコノ時ニ端ヲ發セリ。同年九月二日大阪府立醫學校教諭兼同病院外科醫長ヲ囑託サル。同三十六年五月官選留學生トシテ外科學研究ノ爲獨逸國へ留學ヲ命ゼラレ同三十七年九月歸朝ト同時ニ京都帝國大學福岡醫科大學教授ニ任ゼラル。コノ留學中主トシテミクリツツ教授ニ師事シ專ラ内臟外科殊ニ

九州帝國大學醫學部

胃腸及胆石症ノ手術ヲ研究ス。

斯クテコノ年日露戰役酣ナルヤ陸軍大臣ヨリ陸軍衛生勤務補助ノ件認可セラレ小倉陸軍病院ニ於テ陸軍衛生事務ニ没頭シソノ功績ヲ認めラル。

明治四十四年九州帝國大學創設セラルルヤソノ醫科大學教授ニ任ゼラレ大正二年四月第十四回日本外科學會會長トナリ同會ヲ主宰ス。同五年五月九州帝國大學評議員同六月同大學附屬醫院長トナリ同病院ノ改築ニ盡瘁ス。同十一年第三回歐米出張ヲナシ國際外科學會日本代表トシテジュネーブニ出席シ又獨逸ヲ同學會ニ加入セシムベク努力成功ス。同十二年白耳義ノ國際外科學會會員ニ推サレ同時ニ日本支部會トナリ本部ヨリ更ニ多數會員ヲ推舉ス。同十五年第四回目ノ歐米出張ヲナシ昭和元年獨逸ハレ「獨逸帝國自然科學會員」ニ推薦サル。

昭和二年九州帝國大學停年ニヨリ教授ヲ辭スルト同時ニ同學名譽教授トナリ同三年日本外科學會名譽會員ニ更ニ昭和十七年日本外科學會名譽會長トナル。

以上ノ公的生涯裡ニ或ハ國際的關係親善ニ或ハ育英的事業ニ將又學術的研究方面ニ印セル足跡ハ悉リ國家的價值ヲ有スル所ニシテ今之ヲ

一、世界外科學界ニ對スル功績

二、教育界ニ於ル功績

三、學術界ニ於ル功績

ノ三方面ニ分ケテ敘述スレバ次ノ如シ

一、世界外科學會ニ對スル功績

第一次世界大戰後ニ於ル國際外科學會ノ現状ハ英米佛ヲ主体トセル學會ニシテ事務局ヲ白耳義ニ置キ三宅教授ヲ介シテ本部ニモ同會ニ

九州帝國大學醫學部

加入シ一定數ノ會員ヲ推薦スベキ事ヲ遂ニ依頼シ來レリ。同會ハ獨逸ノ之ニ加擔セン事ヲ肯ンゼズ一方獨逸モ亦獨自ノ見解ニ立チ獨逸外科學會ヲ樹立シテ一方雄飛シ敢テ國際外科學會ニ加入スルヲ欲セズ自ラ欣持スルノ風アリ。而シテ當時ノ獨逸外科學會ハ常ニ創見ニ滿チ所謂國際外科學會ガ徒ラニ各國ヲ糾合シテ多數ヲ誇ルモ學術ノ内容ハ空しく貧弱ニシテ見ルベキモノナリ。一獨逸學會ニ遙ニ及バザルモノアリ。

斯ル兩者ノ徑庭ハ已ニ國際的ニバ平和ヲ恢復シタリシモ學術的ニバ相容レザルノ風潮ヲ助長シ愛フベキ傾向ニアリシヲ以テ恰モ同會ニ本部加入ノ斡旋ヲ乞ハレタル教授バ意ヲ決シテ三度渡歐ノ意ヲ固メ文部省ノ諒解後授ヲ得テ大正十一年四月十一日涉歐シ瑞西ジュネーブノケルバン教授ト協議ソノ同意ヲ得テ大正十五年四月ローマナル國際外科學會ニ日本代表トシテ臨ミ幾多ノ難關障礙ヲ突破シテ遂ニ獨逸



ヲ同會ニ加入セシムル事ニ成功シ同時ニ同會ノ日本支部長ニ推薦セラレ世界的名聲ヲ更ニ高メタリ。

コノ努力ハ獨逸外科學會ヲイタク感激セシメ昭和元年十二月十六日  
"Keiserliche Deutsche Akademie der Naturforschung zu Halle"

ナル學會ヨリ優秀ナル功績ナル理

田ノ下ニ同會名譽會員ニ推薦セラレ、昭和三年多年ノ學勳ヲ表彰シテ獨逸國ヨリ "Deutsche Zeitschrift fuer Chirurgie"

ノ編輯委員ニ推薦セラル。

大正十五年一月九日四度官命ニヨリ歐米へ出張シ此回ハ特ニ米ヲ主トシテ觀察シ更ニ獨逸ニ足ヲ証メ外科學ヲ通ジテ國際友好關係ノ助長ニ努メタリ。大正十四年十月對支文化事業助成ノタメ中北支ヲ遍々遍歷シテ講演行脚ヲ行ヒ半歲ニ渉リ支那各地ノ醫學界ノ誘メニ努メ特ニ甚ダ振バザル同國外科學會ノ向上發展ニ裨益スル甚大ナルモノアリ。

### 九州帝國大學醫學部

#### ニ教育界ニ於ル功績

教授バ九州帝國大學教授トシテ在官スル事二十三年間ニ及ベルモノノ間百八十九名<sup>留學ニ</sup>人ノ門下生ヲ指導訓育シ現在社會極要ノ地位ニ任ゼラル、モノ枚舉ニ違アラズ地方大學教授トシテノ教育界ニ於ル功績バ容易ニ他ノ追隨ヲ許サバルモノアリ。即チソノ門下生ヨリ帝國大學教授ノ職ニ就ケル者六名、單科大學ノ教授トナレルモノ四名、專門學校教授ノ職ニ就ケルモノ五名、計十五名ノ多數ニ上リ之等諸教授ノ門下生ヲ算フル時バ實ニ二千有余名ニ上ル。而シテ直接指導ヲ受ケテ醫學博士ノ學位ヲ授ケラレタルモノ八十四名ニシテ之等バ何レモ縣立病院長又バ外科部長或バ赤十字病院長等ノ官公職ニツキテ地方醫治ノ啓發ニ努メ又地方醫師會ノ主腦部トシテ活躍スルモノ等全國ニ遍ク之ニ軍部樞要ノ位置ヲ占ムル多數門下生ヲ加フル時

誠ニ教育界ニ於ル功績ハ他ニ比肩スルモノ甚タ少ク燦タル光輝ヲ發セルヲ見ル。

### 三、學術界ニ於ル功績

教授ノ學會ニ於ル功績ハ前記幾多ノ功績ニ比シ更ニ光輝燦トシテ永遠ニ没スベカラザルモノアリ。今重要ナルモノヲ拾録スレバ概ネ次ノ如シ。

幾ニ述ベタル如ク大正二年第十四回日本外科學會會長トシテ日本外科學會ヲ主宰セル後大正十四年再ビ第二十六回日本外科學會會長トナリ同會ヲ主宰シ日本外科學會ノ向上ニ資セリ而シテソノ間日本外科學會ノ宿題報告者トシテ選バラル事三回ニ及ベリ。ソノ第一回ハ明治三十五年第四回日本外科學會ニ於ル「化膿性筋炎ニ就テ」ニシテ當時尙世界各國ニ於テ原因不明トセラレタル化膿性筋炎ノ成因頻度及療法等ヲ本邦症例ニツキテ詳述シソノ後更ニ陸軍軍醫部委託生小

### 九州帝國大學醫學部

宮山正則ヲシテ研究ヲ續行セシメ畢竟本邦ニ於ル化膿性腸腰筋炎ノ大ナル原因ハ本邦獨自ノ習慣タル「下駄ヲ穿テ胡座ヲカケ」等ノ事ガ重要ナル原因タル事ニ着目嚆矢シ泰西ト異キヲ異ニスルヲ示セリ。第二回宿題報告ハ「本邦ニ於ル胆石症ニツキ」ニシテ明治四十五年第十三回日本外科學會ニ於テ行ハレタリ。元來當時ニ於ル日本外科學會ノ内臓手術症例ハ極メテ微々タルモノニシテ殊ニ胆石症及胃癌ノ如キハソノ手術例甚タ尠ニスギズ既ニ泰西ニ於テハ多數症例ノ報告ヲ見ルニ對シ甚タ遅レタルノ概アリ教授ハコノ時代ニ於テ數百例ノ胃腸切除成績ヲ報告シテ日本外科學會ノ絶體ヲ博シ醫術ヲ進歩セシメ本症手術ノ改善向上ニ努メソノ退職迄ニ手術セルモノ二千余例ニ及ビ本邦ノ最高標準ヲ示セリ而シテ得タル成績モ又止ニ止メテ優秀ニシテ敢テ歐米ノ報告例ニ準ルコトナクソノ最長生存例ハ實ニ切除後三十一ヶ年ニ及ビ誠ニ世界ノ最高標準ニ到達セリ。九州帝國大學ガ胃腸手術ノ宗

家タルノ名聲ヲ得タルハ正ニ教授ガ畢生ノ努力ノ賜ト云フヲ得  
ベク之ニヨリテ不治ノ難症ヨリ救ハレタルモノ及ビ門下ガソノ手技  
ヲ會得シテ救助セル人命ヲ加算セバソノ數誠ニ甚大ナルモノアルヲ  
見ン。著書トシテ宮城順、谷口熊雄共著ニ成レル「胃癌」(克誠堂  
發行)アリ。第三回宿題報告ハ「胆石症ノ外科的治療」ニシテ大正十三年第二十  
五回日本外科學會總會ニ於テ行ハレタリ。抑モ胆石症ノ實驗的並ニ  
臨床的研究ハ教授ガ畢生ノ事業ニシテ一生ヲ通ジテ門下生ト共ニ之  
ヲ行ヒソノ成果ハ凝ツテ珠玉ノ一篇「日本ニ於ル胆石症」トナリ遂  
ニ學會最高ノ榮譽タル帝國學士院賞ヲ授與セラルルニ至レリ實ニ大  
正昭和五年十月ナリ。今コノ畢生ノ努力ニ成ル「日本ニ於ル胆石症」  
ニ於ル學術的價值ヲ知フニ抑モ人類アル所疾患アリ人種ヲ異ニスル  
ニ從テ特異ナル疾患ヲ生ズ事敢テ奇トスルニ足ラザルモ外科的内臟  
疾患ハ各方面ニ於テ假令人種ヲ異ニスルモノノ症候診斷治療等概ネ

### 九州帝國大學醫學部

一致シ從テ本邦ノ教授ガ外國ノ書籍ニ由テ學生ヲ指導シ又醫師ガ外  
國書ヲ參照シテ醫療ニ從事スルモ敢テ不都合ヲ生ズル事ナシ、然ル  
ニ教授ガ多年ノ研究ニ由レバ「胆石症」ハソノ趣キヲ大イニ異ニシ  
本邦ノ胆石症ハ獨自ノ特徵ヲ有シ到底外國醫ニヨリテハ説明スル能  
ハザル幾多ノ新知見ヲ發見セルモノナリ。  
ソノ重要ナル點ハ彼我ノ「胆石ノ種類」ノ差異ニシテ元來泰西諸國  
ニ於テハ通常最モ多ク遭遇スルハ所謂コレステリン石ニシテ之ヲ普  
通見ル胆石ト稱スルニ對シ教授ガ多年手術裡ニ經驗シ蒐集シ得タル  
胆石ハ彼ニ於テ普通石トスルコレステリン石ハ稀ニシテ反對ニ彼ニ  
於テ稀トスルビリルビン石ガ極メテ多數ナルヲ見タリ茲ニ於テ石山  
福二郎ヲ調査員トシテ調査檢索セルニコノ差異ハ獨リ日本人ノミナ  
ラズ支那滿洲或ハ本島人、半島人、泰國人ソノ他所謂有色人種ニ共  
通ナルノ事實ヲ發見セリ。

茲ニ於テ之等ノ差異ハ東亞共榮圈ニ共通ナル事實ヲ知り恐ラクハ食餌的關係ト共ニ皮膚着色トシテノ血液ノ差異ガ重要ナル因子ヲナスベキ事ヲ知レリ。

之從來世界的ニ全く未見ノ事實ニシテ新生面ヲ開ケルモノナリ。之ト同時ニコノ胆石症ニ關聯シテ所謂「原發性十二指腸移動症」ノ發見トナリ之亦從來全く文獻ニ述ベラレザリシ新疾患トシテ既ニ泰西ノ教科書ニ迄取り入レラルルニ到レリ。之等ノ新發見ヲ骨子トシテ著述セル「日本ニ於ル胆石症」ハ正ニ古今獨歩ノ城ニアルモノトシテソノ學勳ニ對シ帝國學士院ハ授ケルニ學士院賞ヲ以テシ學會最高ノ榮譽ヲ荷フニ至レリ。コノ他ニ學會ニ濳グタル功績ハ枚舉ニ遑アラズト云ヒ得ベク殊ニ「コレラ毒症ノ研究」「胃全副出術」「コレラ諸種ノ腦手術」等ハ黎明時代ノ日本外科學會ニ大ナル光明ヲ與ヘタルモノトシテ大書ニ價ス。夫等ノ詳細ナル論文題目ニ就キテハ之ヲ卷尾ニ掲

### 九州帝國大學醫學部

ゲタリ。教授ハカカル學勳ト同時ニ現在外科醫ガ甚々調法スル結果用剪子ノ發明、變曲ピンセツト胃壓ゲキ子或ハ絹糸代用トシテノ綜ソウ糸ノ發明等簡易ニシテ而モ甚々重要ナル發見ヲ次々ニ發表シ現在多數外科醫ノ蒙ル手術上ノ利益ハ正ニ甚大ナルモノアリ。

以上各方面ノ功績ハ誠ニ甚大ナルモノアルモ更ニ最モ特筆スベキハ教授ガ畢生ノ念願トセル育英ノ事業ニシテ不遇兒ニシテ教授ノ知遇庇護ヲ蒙リ社會樞要ノ地位ヲ占メタルモノ實ニ多數ニ上リ而モ之等ハ何レモ教授ガ全く沈黙裡ニ隱德ヲ施セルヲ以テ世ニ知ラレザルモノノ數蓋シキ夥シキニ上ルベキハ想像ニ難カラズ。蓋シ眞ニ仁術ヲ体得セル達觀ノ士ト稱スルヲ得ベシ。

業績目録

故九州帝國大學名譽教授從三位勳二等 三宅 速

○邦文ノ部

一 リュゾールの防腐上價値に就て

明治二十五年三月 中外醫事新報 二八八號

二 高度の筋肉性斜頸に成筋術を施したる治驗

明治二十五年五月 中外醫事新報 二九一號

三 特發性乳腺結核の一例

明治二十五年五月、六月 中外醫事新報 二九二、二九三號

四 突起及第一頰弓部に於ける畸形に就て

明治二十五年八月 中外醫事新報 二九七號

五 リュゾール浴に就て

明治二十五年十一月 中外醫事新報 三〇三號

九州帝國大學醫學部

六 特發性乳腺結核の一例

東京醫事新誌 七五二、七五三號

七 佝僂病性膝外謙

明治二十六年一月 中外醫事新報 三〇七、八號

八 外傷性左顱頂骨陷凹に伴へる右脚運動麻痺症に穿顱術を施したる

治驗

明治二十六年三月 中外醫事新報 三〇七、八號

九 外傷性左顱頂骨陷凹に伴へる右脚運動麻痺症に穿顱術を施したる

治驗

東京醫事新誌 七七九號

一〇 佝僂病性内臓脚

明治二十六年六月 中外醫事新報 三一七號

二 人体新寄生蟲に就ての豫報（スクリバ先生と共述）

東京醫事新誌 七八〇號

一二腸腰筋の化膿性筋炎に就て

東京醫事新誌 八〇六、八號

一三人の泌尿生殖器内に於ける新寄生蟲噴腎血蟲（スクリバ先生と共述）

明治二十七年八月 中外醫事新報 三四六號

一四下眼瞼に於ける肺チストマ蟲嚢腫の實驗並に徳島縣下肺チストマ病の概況（松井隈太君と共述）

明治二十七年十月 中外醫事新報 三四九號

一五下眼瞼に於ける肺チストマ蟲嚢腫の實驗並に徳島縣下肺チストマ病の概況（松井隈太君と共述）

東京醫事新誌 八六四號

一六再び喰腎血蟲に就て

九州帝國大學醫學部

明治二十八年一月 中外醫事新報 三五五號

一七再び喰腎血蟲に就て

東京醫事新誌 八七五號

一八癰慢性乳房肥大症に就て（内山鍊吉君と共述）

東京醫事新誌 九三五號

一九左側尺骨神經より發し骨片を含有せる角様嚢腫の一例

東京醫事新誌 九七六號

二〇假性筋肥大症の四例及び其筋内の組織的變化に就て（永富恐平君と共述）

明治三十年一月 中外醫事新報 四〇三號

二三鼠毒第一回報告（永富恐平君と共述）

明治三十年五月 中外醫事新報 四一一號

三二化膿性筋炎の臨牀的補遺（永富恐平君と共述）

二三 化膿性筋炎の臨牀的補遺 (永富恕平君と共述) 中外醫事新報 四二七、八、九號

二四 鼠毒第二報告 (永富恕平君と共述) 東京醫事新誌 一〇三七、八、一〇四〇、四一、四二號

二五 鼠毒第二報告 (永富恕平君と共述) 明治三十一年二月 中外醫事新報 四三〇號

二六 新案結紮用剪子 明治三十四年五月 中外醫事新報 四三〇號

二七 脾脫疽癩腫の一例 (白銀豊君と共述) 東京醫事新誌 一二六九號

二八 頸圍に於ける左右同形脂肪腫に就て 第三回日本外科學會誌

二九 鼠毒症の追加 九州帝國大學醫學部

三〇 胃瘻術の追加 第三回日本外科學會誌

三一 傳染に對する組織抵抗力増進の試験的研究 第四回日本外科學會誌

三二 一人體創傷傳染に對する豫防としてヘーフェ・ヌクレイン酸の效力 明治三十八年五月、六月 中外醫事新報 六〇四、五號

三三 左大脳運動中樞に發生せるグリオームの抽出に就て 第七回日本外科學會誌

三四 パンクロフト氏絲蟲の形態的並臨牀的補遺 明治三十九年四月 中外醫事新報 六二六號

三五 左腦皮質運動中樞に於けるグリオームの抽出に就て 明治四十年十月 中外醫事新報 六六二號

東京醫事新誌 一五〇〇號記念號

三五 ジャクソン氏癩癧を誘發せる腦腫の取出に就て

東京醫事新誌 一五九六號

三六 肝臓の眞正（非寄生蟲）莖腫に就て

東京醫事新誌 一六四七號

三七 十二指腸潰瘍の外科的療法補遺

東京醫事新誌 一八〇〇號

三八 氣壓差異の方法の下に手術せる四症例に就て

東京醫事新誌 一八五一號

三九 膽道内に於ける寄生蟲に就て

大正四年六月十二日 東京醫事新誌 一九二五號

四〇 膽石症と黃疸に就て

大正五年六月三日 東京醫事新誌 一九七五號

四一 胃の全摘出術に就て

九州帝國大學醫學部

大正七年五月四日 十一日 東京醫事新誌 二〇七三、二〇七四號

四二 縫合絲として經皮縫合の利用

大正九年一月一日 東京醫事新誌 二一五八號

四三 胃痛切除の好成績は如何にして得べきか

大正十年五月二十一日 東京醫事新誌 二二二八號

四四 痙攣發作の原因たる十二指腸移動症に就て

大正十一年一月一日 東京醫事新誌 二二六〇號

四五 膽石症の手術的經驗

大正十一年五月二十日 東京醫事新誌 二二七九號

四六 迴腸瘻を施して全治したる（瘻管性）手術後腸梗頓症に就て

福岡醫科大學雜誌 第三卷一號

四七 胃痛の外科的療法の經驗

福岡醫科大學雜誌 第三卷第二號



四八 廣汎なる腸切除に就て

福岡醫科大學雜誌 第四卷第一號

四九 不全摘出術を施し胃癩患者供覽

福岡醫科大學雜誌 第四卷第三號

五〇 腸管囊腫様氣腫特に其原因に就て

福岡醫科大學雜誌 第五卷第三號

五一 右總頸動脈瘤を剔出せし久損部に蓋被靜脈管を移植せる患者の供覽

福岡醫科大學雜誌 第五卷第三號

五二 胃切開を施し抽出せる植物纖維腫

醫海時報 第七二號

五三 包出病の三例

醫事新報 第七七三號

九州帝國大學醫學部

五四 胃痛切除七十四の直後茲に永久成績に就て

宇野博士祝賀論文集

五五 蛔蟲迷入に因する膀胱硬變症に就て

第十七回九州沖繩醫學會誌

五六 大腦腫瘍剔出術に就て

第十八回九州沖繩醫學會誌

五七 胃痛切除一百十六例の直後成績に就て

第十九回九州沖繩醫學會誌

五八 日本に於ける胆石症

朝鮮醫學雜誌 第二二號

五九 膽石手術後の瘻孔形成特に總輸膽管環狀縫合術を施せし治例に就て

大正七年七月 日本消化機病學會雜誌 第十七卷第四號

六〇膽石手術後の瘻孔形成特に總膽管環狀縫合術を施せし治例に就て

大正七年五月

實驗醫報

第四年四四號

六一化膿性筋炎に就て(宿題)

第四回日本外科學會雜誌

六二本邦に於ける膽石症に就て

日本外科學會雜誌

第十四卷第三、四、

五號

六三外科的療法を施せし胃腸の治療成績に就て

第十五回日本外科學會誌

六四手術的療法を施せし胸腔内腫瘍に就て

臨牀醫學

第八年四號

六五ゴム管プロテーゼによる總膽管形成術に就て

九州帝國大學醫學部

大正十年十一月二十日

中外醫事新報

一〇〇〇號

六六膽石症の診斷並に外科的療法の現況

日新醫學

第一年第一號

六七胃腸に對する外科的療法の價值

日新醫學

第三年第十二號

六八蟲核突起炎に就て

大正五年四月

日新醫學

第五年第八號

六九膽汁感染(膽囊炎)の原因たる原發性十二指腸移動症

日新醫學

第五年第十二號

七〇廣汎なる腸切除並に日本人の生體四百二十一例に於ける小腸の長さに就て

第十八回日本外科學會誌

七一膽石症手術に於けるドレーナーに就て

臨牀醫學

第十一年第六號

七二 膽囊の疾患（外科的方面）

大正十三年七月八日 日新醫學

第十三年第九、十號

七三 食道に施せし諸手術例に就て

日本外科學會雜誌 二十六回三號

七四 膽石症の外科的療法に就て

第三十回九州醫學會會誌

七五 膽石症の外科的療法

グレンツゲビート 第一年第一號

七六 内外科領域問題としての膽石症（石山福二郎君と共述）

實驗醫報社發行

七七 支那醫學管見

昭和二年一月

東京醫事新誌

第二五〇四號

九州帝國大學醫學部

七八 日本に於ける膽石症

昭和五年

帝國學士院賞授與セラール

七九 胃癌（宮城順、谷口熊藏君と共述）

昭和三年十二月

克誠堂發行

- 1) Miyake u. Soriba  
Nephropagus sanguinis ein neuer menschlicher Parasit  
im Tragenitral-apparat.  
Mittlg. aus d. med. Fak. d. Kaiserl. Univ. zu Tokio  
Bd. 10. Nr. 1894
  - 2) Ueber die Rattenbiss-krh.  
Mittlg. aus d. G.-G. d. med. u. Chir.  
Bd. VII2 S. 231. 1899.
  - 3) Zur experimentellen Erzeugung der Gallensteine mit besonderer  
Berücksichtigung des bakteriellen Verhaltens der Gallenwege.  
Mittlg. aus d. G.-G. d. med. u. Chir.  
Bd. 6. Heft 4-5 S. 479. 1900.
  - 4) Beiträge zur Kenntnis der sog. Myositis infectiosa.  
Mittlg. aus G.-G. d. med. u. Chir.  
Bd. 13. Heft 2. S. 145. 1904.
  - 5) Beiträge zur Kenntnis des Bothriocephalus liguloides.  
Mittlg. aus d. G.-G. d. med. u. Chir.  
Bd. 13. Heft 2. S. 155. 1904.
- 
- 九州帝國大學醫學部
- 
- 6) Exp. Studien zur Steigerung der Widerstandfähigkeit der Gewebe  
Gegen Infektion.  
Mittlg. aus d. G.-G. d. Med. u. Chir.  
Bd. 13. Heft 2 S. 155. 1904.
  - 7) Nahtmaterial mit verzögerter Resorption.  
Brunn's Beiträge zur Klin. Chir.  
Bd. XL3 Heft 2. S. 561 1904.
  - 8) Morphologische und klinische Beiträge zur Filaria Bancrofti.  
Zeit. f. Hygiene u. Infekt-krh.  
Bd. 59. S. 751. 1908.
  - 9) Ueber die Ascariiden-erkrankung in der Chirurgie.  
Langenbeck's Archiv.  
Bd. 85. Heft 1. S. 325 1908.
  - 10) Zur Exstirpation der Gehirntumoren in der motor. Rindenzentren.  
Langenbeck's Archiv.  
Bd. 88. Heft 3. S. 811. 1909.
  - 11) Ein Fall von traum. Aphasie mit re. Hemiplegie bei linksseitiger  
Trenpanation. Heilung.  
Langenbeck's Archiv.  
Bd. 88. Heft 3. S. 800. 1900.

- 12) Ueber Pneumatosis cystoides Intestinum, insbesondere deren Aetiologie.  
Langenbeck's Archiv.  
Bd. 95. Heft 2. S. 429. 1911.
- 13) Ueber ausgebreitete Darmresektion mit einer kurzen Bemerkung Ueber die normale Lage des Jejunum-Ileum bei dem Lebenden.  
Langenbeck's Archiv.  
Bd. 93. Heft 3. S. 768. 1910.
- 14) Statistische, klinische und chemische Studien zur Aetiologie der Gallensteine, mit besonderer Berücksichtigung der japanischen und deutschen Verhältnisse.  
Langenbeck's Archiv. Bd. 101. Heft 1. S. 54 1913.
- 15) Die Resultate der op. Behdg. des Magenkrebses, insbesondere Ueber Dauerheilung  
Mittlg. aus d. med. Fakult. d. Kaiserl. Kyueiu Univ. 1916.
- 16) Das primäre "Duodenum mobile" als Ursache von Kolikaffection.  
Ein neues Krankheitsbild.  
Langenbeck's Archiv.  
Bd. 122. Heft 1. S. 269. 1922.
- 17) Vorläufige Mitteilung Ueber ein neues Mittel "Noktol" zur Verhütung d. peritonischen bzw. serösen Verwachsungen.  
Zentralblatt für Chirurgie  
Nr. 50. 1922
- 18) Ueber die Dauerresultate der operativen Behdg. bei der sog. Hebergangsform zur Jackson'schen Epilepsie.  
7.e. Congrès de la Société Internationale de Chirurgie  
Com 1926.

九州帝國大學醫學部

本籍地 徳島縣美馬郡三島村大字中島一七一九番地

三ミ ヤケ  
宅  
ハヤシ  
速  
應慶三年參月拾八日生

明治二十年 七月 日 第一高等中學校第貳號學科卒業

九月 日 東京帝國大學醫科大學醫學科へ入學

明治廿四年 十一月 日 同卒業同二十二年ヨリ二十四年マテ毎歲特待學生ヲ命

ゼラル

明治廿五年 一月 日 同二十六年九月マテ醫科大學助手ヲ命ゼラレ第一醫院

外科へ勤務仰付ラル

帝國大學

明治三十年 三月 日 獨逸國へ留學同三十三年六月歸朝

明治三十四年 六月 日 論文ヲ提出シ醫學博士ノ學位ヲ授與セララル

九月 二日 大阪府立醫學校教諭兼醫學校病院外科醫長ヲ囑託ス 大阪府

明治三十五年 十二月 日 大阪府立醫學校教諭兼醫學部病院外科醫長囑託ヲ免ス 同

明治三十六年 五月 日 外科學研究ノ爲滿一ケ年牛獨逸國へ留學ヲ命ス

明治三十七年 九月 日 歸朝

九月十九日 任京都帝國大學臨岡醫科大學教授

敍高等官六等

内閣

同 本俸三級俸下賜

同 外科學第二講座擔任ヲ命ス

文部省

十一月三十日 敍正七位

宮内大臣宣

明治三十八年 三月十一日 陸軍衛生勤務補助ノ件許可

陸軍大臣

明治三十九年 四月一日 敍勳六等授瑞寶章

賞勳局

明治三十九年 五月 九日 外科學第一講座分擔ヲ命ス

分擔講座職務俸金五百圓下賜

文部省

八月 三日 外科學第二講座擔任並外科學第一講座分擔ヲ免シ更ニ

外科學第一講座擔任並外科學第二講座兼擔ヲ命ス

同

九月 二十日 外科學第二講座兼擔ヲ免シ更ニ外科學第二講座分擔ヲ命ス

分擔講座職務俸金四百五十圓下賜

文部省

十月 二十日 陞叙高等官五等

内閣總理大臣宣

十二月 廿七日 叙從六位

宮内大臣宣

明治四十年 二月 廿五日 外科學第二講座分擔ヲ免ス

文部省

六月 勅令第二百三十二號ニ依リ本俸五級俸

九月 七日 本俸四級俸下賜

文部省

明治四十二年 一月 廿六日 陞叙高等官四等

内閣總理大臣宣

明治四十二年 四月 二十日 叙正六位

宮内大臣宣

六月 十日 整形外科學講座分擔ヲ命ス

分擔講座職務俸金貳百拾五圓下賜

文部省

明治四十三年 月 日 勅令第三百三十四號ニ依リ金千七百圓下賜

明治四十四年 四月 一日 勅令第四十三號ニ依リ九州帝國大學醫科大學教授ニ任

セラル講座及職務俸如故

勅令第四十五號ニ依リ京都帝國大學福岡醫科大學ハ九

州帝國大學醫科大學トナル

四月 廿八日 陞叙高等官三等

内閣

六月 三十日 叙從五位

宮内省

十二月 廿六日 叙勳五等授瑞寶章

賞勳局

明治四十五年 七月 十七日 整形外科學講座分擔ヲ免ス

文部省

75

九州帝國大學醫學部

大正二年	十月八日	本俸三級俸下賜	文部省
	十二月十八日	陞敘高等官二等	内閣
大正三年	二月廿八日	敘正五位	宮内省
	十二月廿三日	敘勳四等授瑞寶章	賞勳局
大正五年	五月廿二日	九州帝國大學評議員ヲ命ス	文部省
	六月三日	補九州帝國大學醫科大學附屬醫院長	同
		職務俸金六百圓下賜	同
大正六年	四月廿五日	外科學第二講座分擔ヲ命ス	同
		分擔講座職務俸金貳百圓下賜	同
大正八年	一月四日	依願九州帝國大學醫科大學附屬醫院長ヲ免ス	同
	一月廿八日	敘勳三等授瑞寶章	賞勳局
	三月卅一日	敘從四位	宮内大臣宣
	四月一日	官制改正九州帝國大學教授ニ任ゼラル官等如故	
	同	醫學部勤務ヲ命ゼラル	
	同	帝國大學令改正九州帝國大學醫科大學ハ九州帝國大學醫學部トナル	
	同	賜本俸二級俸	文部省
大正九年	四月八日	外科學第二講座分擔ヲ免ス	同
	八月十七日	俸給令改正ニ依リ本俸四千七拾圓	
		講座職務俸九百八拾圓トナル	
	九月二十日	陞敘高等官一等	内閣
大正十年	六月三十日	賜本俸二級俸	文部省
	同	講座職務俸金千貳百八拾圓下賜	同
大正十一年	四月一日	歐米各國へ出張ヲ命ス	同



大正十一年 十一月十七日 歸朝

大正十三年 四月三十日 賜本俸一級俸

五月十五日 叙正四位

大正十五年 一月九日 歐洲へ出張ヲ命ス

二月廿五日 叙勳二等授瑞寶章

六月六日 歸朝

昭和二年 九月廿七日 整形外科學講座分擔ヲ命ス

分擔講座職務俸金參百圓下賜

十月卅一日 依願免本官

十二月十五日 叙從三位

十二月廿六日 帝國大學令第十三條ニ依リ勅旨ヲ以テ九州帝國大學名譽教授ノ名稱ヲ授ク

文部省

文部省

宮内大臣

文部省

文部省

同

内閣

宮内省

内閣

昭和三年 一月七日 退官ニ付普通恩給年額金貳千參百貳拾圓ヲ給ス

恩給局

昭和五年 月 日 「日本に於ける膽石症」ニ對シ帝國學士院賞ヲ授與セラル

昭和十五年 八月十五日 昭和十五年勅令第四百八十八號ノ旨ニ依リ紀元二千六百年祝典記念章ヲ授與セラル (第四三二六號)

昭和二十年 六月二十九日 薨死 (遺失)